

# マレーシアの日本語学習者と日本語学習環境

阿久津 智(拓殖大学)

## 1. はじめに

このレポートでは、国立国語研究所(以下、「国語研」)が「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」の一貫としてマレーシアで行ったアンケート調査とインタビュー調査の資料を用いて、マレーシアの日本語学習者と日本語学習環境の特徴について見ていきたいと思います。この調査研究については、国語研から『平成17年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 マレーシアアンケート調査集計結果報告書』(以下、『報告書』)が出ていますが、このレポートでは、対象を学習者にしぼり(国語研の調査は教師に対しても行われています)、インタビュー資料も使い、『報告書』とは違う枠組み(種別)によって、マレーシアにおける日本語学習について見ていきたいと思います。

はじめにお断りしておきますが、このレポートでは、調査資料(結果)を見て私が特徴的だと思ったことをあげるにとどめ、踏み込んだ分析や、それを踏まえた議論や提言は行いません。それは、私がすでにマレーシアの現場を離れて久しく、現地での調査にも直接かかわっておらず、ただ資料を利用して何か述べるしかない立場だからです。

さて、本論に入る前にマレーシアの日本語教育の特色について簡単にふれておきます。マレーシアの日本語教育は、主として政府主導で進められてきたという特色を持ちます。マレーシア政府は、長年にわたり、日本(および他の東アジアの国)に学び、主にマレー人の人材育成を行おうという「東方政策」を推し進めてきました。そして、この政策のもとに各種の日本語コースが開設されてきました。その中には、全寮制のエリート中等教育機関における第2外国語としての日本語クラス、日本の大学や高等専門学校への留学を目標とした複数の予備教育プログラム、日本への産業技術研修生派遣に向けた日本語教育プログラムなどがあります。これらのプログラムの多くに日本政府による経済的・人的支援が行われてきたこともマレーシアの日本語教育の特色といえると思います。

しかし、マレーシアにおける日本語教育はもちろんこれだけではありません。日本語はほかにもいろいろな形で学ばれています。私は、マレーシアにおける日本語学習の大きな特徴は、教育段階あるいは教育機関の種類によって、かなり異なる学習者像が見られることではないかと思っています。

そこで、このレポートでは、まず国語研のアンケート資料をもとに、日本語教育機関の種類ごとに学習者の特徴と日本語との接触のようすについて概観したいと思います。次に、インタビュー資料から、日本留学プログラムと非営利団体の日本語クラスという対照的な機関(各1機関)の学習者を例にとり、その学習動機と「日本語の見聞き」について詳しく見ていきたいと思っています。

## 2. アンケート調査に見る日本語学習者と日本語学習環境

### 2.1. 対象

ここでは、国語研が2004年6～7月に行った「マレーシアアンケート調査」のうち、「学

習者調査票」の回答について見ていきます。これは以下にあげる教育機関の種別ごとに行います。上で述べたように、種別によって学習者に違いが見られることが、マレーシアの日本語教育の特徴ではないかと思うからです。

その種別ですが、国語研の『報告書』では調査対象機関を「中等教育機関・高等教育機関・学校教育以外の機関」の3つに分けていますが、ここでは、次の5つに分類したいと思います。この分類のほうが、同種の機関がまとまり、それぞれの性格がはっきりと見られると思うからです。

- A 中等教育機関(略称「中等教育」)
- B 日本留学予備教育・高等教育機関(略称「留学前教育」)
- C 高等教育機関(略称「高等教育」)
- D 一般日本語教育機関(略称「一般」)
- E その他の特殊な日本語教育機関(略称「特殊」)

「A 中等教育機関」は、『報告書』の「中等教育機関」と同じです。日本の中学・高校に相当する機関です。

「B 日本留学予備教育・高等教育機関」は、『報告書』の「高等教育機関」のうち、日本留学プログラムにおける留学前教育を行っている(正規の)予備教育・高等教育機関です。

「予備教育」は、教育段階としては「中等教育後、非高等教育」段階(つまり、高校と大学の間)に当たります。

「C 高等教育機関」は、『報告書』の「高等教育機関」のうち、上のB以外の大学およびカレッジです。カレッジは、日本の短大や専門学校に相当します。

「D 一般日本語教育機関」は、『報告書』の「学校教育以外の機関」のうち、民間の日本語学校と非営利団体の日本語クラスです。

「E その他の特殊な日本語教育機関」は、『報告書』の「学校教育以外の機関」のうち、上のD以外のもの、すなわち、組織内教育、企業内研修、公務員等に対する教育、B以外の日本派遣プログラムなどを行っている機関です。ここには性格の異なるものが含まれています。

表1に種別ごとの対象学習者数をあげておきます。

表1 アンケート調査 対象学習者数

『報告書』での分類	中等教育		高等教育		学校教育以外		合計
	A 中等教育	B 留学前教育	C 高等教育	D 一般	E 特殊		
本稿での分類	A 中等教育	B 留学前教育	C 高等教育	D 一般	E 特殊		
分析対象学習者数	2, 276人 (42.5%)	562人 (10.5%)	1, 683人 (31.4%)	644人 (12.0%)	195人 (3.6%)		5, 360人 (100%)
上の所属機関数	40機関 (44.4%)	4機関 (4.4%)	19機関 (21.1%)	15機関 (16.7%)	12機関 (13.3%)		90機関 (100%)

## 2.2. 結果

ここでは、「学習者調査票」にある以下の項目について見ていきます。なお、『報告書』に数値の載っている一部のものを除いて、集計はここで独自に行いました。( < >内は「学習者調査票」の項目番号です。詳しくは『報告書』をご覧ください)

- ・「学習者について」の項目
  - 性別<F1>, 年齢<F3>, 母語<F4>, 訪日経験<F8>, 学習動機<F9>, 日本語能力<F10>
- ・その他の質問項目
  - 日本語を使ってのやりとりの有無<Q1>,  
最もよくやりとりをする相手<Q1-2①>,  
身の回りで日本語が使われているものの有無<Q2>,  
最もよく見聞きするもの<Q2-3①>,  
日本語に接する機会や場所の利用経験の有無<Q4>

集計結果は表2と表3にまとめて示します。ここでは、大まかな傾向を見るのが目的ですので、いちいち数値をあげることはしません。また、マレーシア全体の結果についてはここにはあげません。こちらについては『報告書』をご覧ください。

### 2.2.1. 「学習者について」の項目

まず「学習者について」の項目の集計結果を表2に示します。

表2 アンケート調査 「学習者について」の項目

	性別*	年齢*	母語*	訪日経験*	主な日本語学習動機**	日本語力***
中等教育					1. 日本語に興味がある 2. 日本に行きたい 3. 学校の授業にある	読む: 2.68 書く: 2.69 聞く: 2.36 話す: 3.08
留学前教育					1. 科学技術に興味がある 2. 日本に行きたい 3. 日本に興味がある 4. 日本語に興味がある 5. 日本のものが好きだ	読む: 3.76 書く: 3.91 聞く: 3.30 話す: 3.82
高等教育					1. 日本語に興味がある 2. 日本に行きたい	読む: 2.25 書く: 2.26 聞く: 2.05 話す: 2.76
一般					1. 日本語に興味がある 2. 日本に行きたい 3. 文化や社会の情報を得たい	読む: 2.91 書く: 2.72 聞く: 2.45 話す: 3.02
特殊					1. 現在の仕事に必要な 2. 日本語に興味がある 3. 科学技術に興味がある	読む: 2.24 書く: 2.26 聞く: 2.21 話す: 2.91

\*無回答や不明を除いた割合となっている。

\*\*18の選択肢から順位をつけて3つ選ばせ、1位3点、2位2点、3位1点として集計した。表には各種別で総得点に占める割合が10%以上のものをあげた(20%以上のものはゴシック太字にした)。

\*\*\*6段階評価(「1. 全くできない」～「6. 母語と同じようにできる」)の平均値である。

表2を見て、私が種別による特徴だと思うことを順不同で以下にあげます。

・種別により学習者の年齢層に違いが見られる。

表2では上から下へ行くにしたがって学習者の年齢層が上がっています。これは、ここで設けた種別が主に教育段階に基づいているからで、当然のことかもしれません。

「一般」のところに13%ほど10代の学習者がいますが、これは資料にあたりますと、ほぼ学生(中学生から大学生まで)のようです。つまり、正規の学校とは別に(たぶん放課後や休日に)日本語を学んでいる学生もいるということのようです。

・種別により母語(すなわち、民族)の偏りが見られる。

「中等教育」と「留学前教育」では、マレー語を母語とする者(すなわち、マレー人)が大多数であるのに対し、「高等教育」と「一般」では、中国語を母語とする者(すなわち、華人)が多数派になっています(母語を「英語」とした「一般」の学習者にも華人が多いのではないかと思います)。これは、「中等教育」と「留学前教育」(および一部の「特殊」)の日本語教育が主に「東方政策」(これは主としてマレー人材の育成をめざす政策です)のもとに行われているのに対し、そこに入れない多くの華人にとってはその他の機関が日本語を学ぶ場になっていることを示すものだと思います。

・「留学前教育」にほかに違った特徴が多く見られる。

「留学前教育」には、男性の比率が高い、主な学習動機が多岐にわたる、日本語力が比較的高い、などの特徴が見られます。男性の比率が高いのは、マレーシア政府の理工系人材育成政策により、日本留学の専攻が主に工学系となっていることと関係があると思います。学習動機については、表にあげたうちでも「日本の科学技術に興味がある」と「日本に行きたい」がとくに得点が高くなっていますが、このことは日本語力とあわせて、留学前教育の学習者が日本留学や日本語学習に対して高いモチベーションを持っていることを示していると思います。

・「特殊」では「現在の仕事に必要だ」を学習動機とする者が多い。

「現在の仕事に必要だ」は、ほかの「主な日本語学習動機」には現れていませんが、「特殊」ではとくに得点が高くなっています。これは、主として、「特殊」が企業(主に日系)の従業員に対する組織内教育としての日本語教育を多く含んでいることによるのではないかと思います。

### 2.2.2. その他の質問項目

つづいて表3に、その他の質問項目の集計結果を示します。質問はいずれも「日本語の授業(教材)以外」での日本語との接触について聞いています。

表3 アンケート調査 その他の質問項目

	日本語でのやりとりの有無*	最もよくやりとりする相手**	身の回りでの日本語の有無*	最もよく見聞きするもの**	日本語に接する機会の経験の有無*
中等教育		1. 学校の友人 2. 日本語教師		1. テレビ 2. ビデオ・VCD・DVD 3. ゲームソフト 4. 本	
留学前教育		1. 日本語教師 2. 学校の友人 3. クラスメート		1. ビデオ・VCD・DVD 2. 音声テープ 3. CD 4. 本	
高等教育		1. 日本語教師 2. 学校の友人 3. クラスメート		1. ビデオ・VCD・DVD 2. テレビ	
一般		1. 日本語教師 2. クラスメート 3. 知り合い		1. ビデオ・VCD・DVD 2. テレビ 3. 本	
特殊		1. 日本語教師 2. 職場の同僚 3. クラスメート		1. ビデオ・VCD・DVD 2. 本 3. テレビ	

\*無回答や不明を除いた割合。

\*\*11(「やりとり」)ないし14(「見聞き」)の選択肢から1つ選ばせた。表には各種別で回答者の10%以上が選んだものをあげた(ゴシック太字は20%以上のものである)。なお、「見聞き」にある「VCD」とは「ビデオCD」のことである。VCDは画質は悪いものの、ビデオカセットやDVDより安価なため、この調査の時点において、マレーシアで最も一般的に視聴されている映像記録媒体であった。

表3を見ると、全体として日本語を使う機会や日本語に接する機会がそれほど多くないことがうかがえます。種別で見ると、「留学前教育」と学校教育以外(「一般」と「特殊」)に比較的機会が多く、「中等教育」と「高等教育」には少ないということがいえるようです。

細かい点について見ると、「特殊」で「最もよくやりとりをする相手」の第2位に「職場の同僚」があがっていますが、これは先に述べたように、「特殊」の回答者に企業(主として日系)の従業員が多いことによるのだと思います。

ほかに、「最もよく見聞きするもの」としては、「中等教育」の「ゲームソフト」、「留学前教育」の「音声テープ(カセットテープ)・CD」などが特徴的ですが、これはその年代の興味(中高生にとってのゲーム、18歳前後の若者にとっての音楽)を示すものではないかと思えます。

これまで見てきたように、アンケート調査結果からは、学習機関の種別による学習者の違いが見られ、そこにはマレーシア特有の事情もうかがえます。しかし、これが学習環境の大きな違いとなって現れているわけではなさそうです。大ざっぱに言ってマレーシアの学習者が日本語と接触する機会はそれほど多くないといえそうです。

### 3. インタビュー調査に見る日本語学習者と日本語学習環境

#### 3.1. 対象

次に、国語研が2004～2005年に行ったインタビュー調査から、「留学前教育」と「一般」(各1機関)の学習者について見ていきます。

ここで見ていくのは、「留学前教育」では「日本マレーシア高等教育大学連合 Japanese Associate Degree プログラム」(セランゴール州バンギ, 以下「JAD」)の学習者、「一般」では「ペラ馬日友好協会」(ペラ州イポー市, 以下「協会」)の学習者です。インタビュー調査の時期は、JADが2004年11～12月、協会が2005年10月でした。

この2つの機関を選んだのは、一方はマレーシア政府の東方政策に連動する日本留学プログラム(学生は政府系機関によって選抜され、配属されます)であり、他方は民間の非営利団体が行っている日本語クラス(希望者はだれでも参加できます)であるため、対照的な日本語学習者像(それぞれの種別における代表的な学習者像)が見られるのではないかと考えたからです(なお、JADは私が2000～2003年度に勤務していた機関です)。

両機関におけるアンケート調査とインタビュー調査の対象学習者数を表4にあげておきます。また、インタビュー調査に協力してくれた学習者に関する基本情報を表5にあげておきます(いずれも調査時点におけるものです)。

表4 アンケート調査・インタビュー調査 対象学習者数

	JAD プログラム	ペラ馬日友好協会*
学習者総数(協会は常時出席者数)	57人	100人以上
アンケート調査 分析対象数	57人	82人
インタビュー調査 協力者数	56人	41人
上のいずれでも対象となった者の数	56人	23人

\*アンケート調査やインタビュー調査には14歳以下の子供も協力しているが、ここでは15歳以上の者のみを取り上げる。この表には15歳以上の者の数をあげた。

表5 インタビュー調査 調査協力学習者に関する基本情報(単位:人)

	性別	民族	年齢	身分	日本語学習歴	訪日経験	日本語レベル
JAD 56人	男性:43 女性:13	全員 マレー人	全員 18～20歳	全員 大学1年生	1～2年:52 5年以上:4	ある:3 ない:53	中級～上級:55 超級:1
協会 41人	男性:14 女性:27	華人:38 マレー人:2 インド人:1	10代:5 20代:13 30代:11 40代:8 50代:4	勤労者:34 学生:6 主婦:1	1～2年:11 3～4年:14 5～6年:5 9年以上:11	ある:5 ない:36	初級:22 中級:11 上級:8

#### 3.2. 結果

インタビューは、両機関とも、調査者(主にその機関の教員)1名に対し数名の調査協力者(その機関の学習者)というグループ形式で行われました。使用言語は、JADは日本語のみ、協会は主として日本語で、適宜媒介語(英語・マレー語・広東語、通訳を使用)をまじえました。

インタビュー項目は多岐にわたりますが、ここでは、アンケート調査の項目にもある「日本語の学習を始めた理由や動機」と「日本語が使われているもので見聞きするもの」にし

ぼり、アンケート調査からはうかがえない部分まで見ていきたいと思います。

このうち、「日本語の学習を始めた理由や動機」については、実際のインタビューでは、両機関とも「どうして日本語を勉強しようと思いましたか」などと聞いています。また、「日本語が使われているもので見聞きするもの」については、JAD では「学校が終わってから、日本語を見たり聞いたり読んだりしますか」などと、協会では「日本のドラマやアニメ、映画を見ますか」「日本の歌を聞きますか」などと聞いています。

なお、以下の「学習動機」には答えた者の人数を書きましたが、これは概数と考えてください。不明な部分が多くあるからです。また、回答はすべて複数回答です(1つの質問に対していくつ答えを言ってもいいという形式です)。

### 3.2.1. 学習動機

まず、JADの学習者の「日本語の学習を始めた理由や動機」について見ていきます。

先にアンケート調査の結果をあげておきますと、「留学前教育」全体と同様、「日本の科学技術に興味がある」と「日本に行きたい」がとくに得点が高く、総得点に占める割合は、それぞれ27%と21%でした。

インタビュー調査でも、「日本に留学したい」「日本の技術が勉強したい」というような答えがとくに多く見られました(20人以上)。しかし、これについて、調査者がさらに詳しく聞くと、「JADに入ってからそう思った」とか「日本のことは何も知らなかった」などと答える者が多く、日本語の学習を「始めた」理由としては、むしろ「日本留学プログラムに(たまたま)配属されたから」という者が少なくないようでした。

このほかに、「英語が苦手だから」「英語の試験の成績が悪かったから」などといった答えも多く見られました(8人)。これは英語圏への留学が難しいため、日本留学プログラムに来たというもので、これも積極的な学習動機とはいえないと思います。どちらかというところ、JADの学習者には、消極的な理由で日本語学習を始めた者が多いように思われました。

一方、もう少し積極的に日本語学習を始めたのではないかと思われる動機としては、「アニメを見て興味を持った」「漫画が大好き」「車が好き」など、日本のものに対する興味が多くあがりました(8人)。また、「中国語はうるさい感じがするが、日本語はうるさくなくて、いい感じだ」や「漢字の勉強は脳を使い、知識が身につく(イメージ)」などというように、日本語(主に話し方や文字など)に興味があったという者もいました(6人)。

つづいて、協会の学習者の学習動機について見ていきます。

先にアンケート調査の結果をあげておきますと、「一般」全体と同様、「日本語に興味がある」がとくに得点が高く(総得点に占める割合は25%)、「日本の文化や社会の情報が得たい」と「日本に行きたい」がそれにつづいていました(総得点に占める割合は、それぞれ14%と12%)。

しかし、インタビュー調査で最も多かったのは、ただ「興味」「趣味」「おもしろい」と答えた者でした(16人)。

ほかに、「言語が好き」や「日本語に興味がある」など言葉への興味をあげた者、「友達に誘われて」や「姉につれられて」など人の影響で学習を始めたという者、「仕事で使う」「新しい仕事に就きたい」など仕事や就職を理由にあげた者が、それぞれ8人ずついました。

一方、「日本の文化が好き」や「日本の漫画が大好き」など日本の文化やもの(漫画やドラマ)への興味をあげた者や、「日本の大学に入りたい」など留学の希望をあげた者は少数でした(それぞれ4人と2人)。

全体として、協会にはとくに目的を持たずに日本語を学びはじめた者が多いように思われました。ですが、「日本語のクラスは楽しいか」という質問に対しては、ほぼ全員が「楽しい」と答えていました。

また、学習動機とは別に、「日本に行く予定があるか」という質問も行っていますが、これに対しても、ほぼ全員が「行きたい」と答えていました。その内容については、「旅行したい」(23人)と「勉強したい」(11人)がほとんどでした。ただし、これらはいずれも「希望」であって、「予定」ではないようでした。

### 3.2.2. 日本語の見聞き

まず、JADの学習者の「日本語が使われているもので見聞きするもの」について見ていきます。

先にアンケート調査の結果をあげておきますと、「(学習教材以外で)最もよく見聞きするもの」(1つ選択)では、「留学前教育」全体と同様、「ビデオ・VCD・DVD」が最も多く選ばれました(回答者56人のうち54%が選択しています。なお、「最も」でなく、複数選択の「見聞きするもの」としては回答者56人のうち98%が選択しています)。

これについて、「コンピュータ(インターネット等)」が選ばれましたが(「最もよく見聞きするもの」として回答者の25%が選択しています。また、複数選択の「見聞きするもの」としては回答者の84%が選択しています)、これは「留学前教育」全体とは異なるもので、この機関の特徴といえるのではないかと思います(JADでは多くの者が個人でパソコンを所有していたようです)。

インタビュー調査でも、「VCD(ビデオCD)で日本のドラマやアニメを見る」という答えがとくに多く見られました。ただし、自分でVCDを買うという者は少数で、多くの者はVCDをたくさん持っている友達から借りて見ているようでした(JADは全寮制ですが、インタビューからは、寮の一室で数人の者が1台のパソコンのまわりに集まってドラマやアニメを見ているようすがうかがえました)。字幕(英語やマレー語)については、「(確認のために)ときどき見る」という者が多いようですが、「VCDを買うときに字幕はチェックしない」との発言もあり、あまり字幕にはこだわらないようすもうかがえました。

また、インターネットに関して、インタビュー調査では、「インターネットで日本の音楽をダウンロードする」「インターネットで日本の漫画を読む」「日本人の友達と電子メールでやりとりする」などという答えが多く見られました。しかし、「(授業とは関係なく)日本語のウェブサイトを見る」という答えはあまり多くありませんでした。JADでインターネットの利用が多いことには、情報工学(や日本語)の授業でインターネットを使っていることの影響があるのではないかと考えられます(ただし、寮にインターネット回線はないそうです)。

JADの学習者は「ドラマやアニメを見る」にしても、「音楽(歌)を聞く」にしても、パソコンを使うことが多いようです。とくに音楽については、CDやカセットテープというメディアがあるにもかかわらず(アンケート調査では、複数選択の「見聞きするもの」として、回答者の61%と34%が、それぞれCDとカセットテープを選択していました)、インタビュー

では、インターネットでダウンロードしたもの(主にポップス)をパソコンで聞くと答えた者のほうが多くいました。

そのほかには、漫画の本、テレビのドラマ、ゲーム、NHKの衛星放送(JADで受信可)、ラジオ番組、映画、雑誌、新聞、小説などがあがりました。

つづいて、協会の学習者の「日本語の見聞き」について見ていきます。

先にアンケート調査の結果をあげておきますと、「最もよく見聞きするもの」では、「一般」全体と同様、「テレビ(ニュース、ドラマなど)」と「ビデオ・VCD・DVD」がとくに多く選ばれました(回答者55人のうち、それぞれ34%と28%が選択しています。複数選択の「見聞きするもの」としては、回答者60人のうち、それぞれ65%と58%が選択しています)。

インタビュー調査でも、「日本語の見聞き」に関しては、日本のドラマやアニメを見ているという答えがとくに多く見られました。主に日本語音声に字幕(中国語や英語)付きで見ているようでした。

ちなみに、この調査時点(2005年10月)で、協会のあるイポー地区では、テレビの地上波チャンネルで、「ドラえもん」「ポケモン」「名探偵コナン」など日本のアニメを1週間に7本放送していたそうです(ただし、すべてマレー語吹き替えだったようです)。一方、日本のドラマは、以前は週に何本か放送されていたようですが、韓国ドラマに押され、この時点では数か月おきに1本という状態だったようです。こうしたことから、協会の学習者は、この調査時点においては、日本のドラマやアニメを主にVCDで見ているのではないと思われま

す。インタビューからは、ほかに、音楽(歌)、漫画の本、雑誌、映画、インターネット、ゲーム、NHKの衛星放送などに接しているようすがうかがえました(ただし、音楽以外はどれも少数でした)。全体として、協会の学習者はJADの学習者ほど日本語を見聞きしてはいないように思われました(アンケート調査でも、協会はJADより日本語を見聞きしている者が少ないという結果が見られました)。

以上、インタビュー調査から、「留学前教育」と「一般」の学習者について、簡単に見てきました。

「留学前教育」のJADには、プログラムの性格からだと思われま

すが、学習動機や学習目的のはっきりした学習者が多く見られました。しかし、多くの者にとってモチベーションが上がったのは、このプログラムに入ってからのものでした。日本のドラマや音楽に多くふれるようになったのも、JADに入ってからのものでした。

一方、「一般」の協会の学習者には、とくに目的を持たず、趣味として日本語を学ぶ者が多いように思われました。インタビューをした協会の教師によると、協会には、「学習前には『ニーズ』や『目標』があったが、学習を始めたあとはただ日本語を勉強することが『目的=趣味』になった学習者」と「日本語や文化に興味があつて始めたが、上達するにつれ何かに役に立てたいと思うようになった、しかし、就職や仕事などという積極的なものではない」という学習者がいるようだといいま

とだと思えます。

#### 4. おわりに

以上、国語研のマレーシア調査から、マレーシアの日本語学習者と日本語学習環境についてごく大ざっぱに見てきました。

最後に1つ感想を言いますと、インタビューを書き起こした資料を読んでいて、私が興味を持ったのは、インタビューをしていた教員が学習者の話にしばしば驚いていた点です。たとえば、JADの調査では、「1週間に1回、夜中にラジオで、日本留学経験のあるマレー人が日本語でしゃべる番組をやっている」とか「日本の漫画の本をスキャンしたファイルをインターネットでダウンロードできる」などといった学生の発言に、教師が「それは初めて聞いた」「知らなかったね」などと反応していました(実は私もいっしょに驚いていたのですが)。当たり前のことでは、このような調査は、何よりも現場の教師が学習者の学習環境や学習手段を理解するのに役に立つのだということを感じました。

さらに、もう1つ、この原稿を書き上げてから知ったことを付け加えますと、国語研の調査研究がきっかけとなり、ペラ馬日友好協会が日本語環境をよくするために勉強会やその他の活動を始めることになったといます。僭越なことを言うようですが、こういったことこそ、この調査研究の本当の成果だと思います。日本語をもっともっと楽しく学べる場がもっともっと増えることを期待したいと思います。

#### 参考文献

阿久津智(2005a)「マレーシアにおける日本語学習者」『拓殖大学 語学研究』第108号, pp. 157-173, 拓殖大学言語文化研究所

阿久津智(2005b)「日本語の可能性 海外の日本語教育の現場から」『人文・自然・人間科学研究』第14号, pp. 59-72, 拓殖大学人文科学研究所

国際交流基金(2004)『日本語教育国別情報』2004年度 国別一覧

([http://www.jpff.go.jp/j/japan\\_j/oversea/kunibetsu/2004/index.html](http://www.jpff.go.jp/j/japan_j/oversea/kunibetsu/2004/index.html))

国立国語研究所(2005)『平成17年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 マレーシアアンケート調査集計結果報告書』

小林百恵・阿久津智(2006)「マレーシアの一般日本語教育機関における学習者の学習意識と学習環境 -ペラ馬日友好協会を一例として-」(平成17年度 国立国語研究所日本語教育シンポジウム「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 一海外調査の成果と展望」ポスター発表)